

スウェーデンの社会保障

太 田 義 武

(静岡県児童課長)

ただ今ご紹介を受けました太田でございます。なぜ静岡県の児童課長がここに来たかということですが、私、たまたま1976年から3年間スウェーデンに住んでおりました。社会保障のことを少しかじって参ったものですから、その時の状況を今日は海外トピックスということで話をしてほしいという依頼がございました。そういうわけで、このような場に立つことになったわけでございます。

これから1時間50分近くスウェーデンの社会保障につきましてごく概略的に、トピックス的なものをお話し申し上げたいと思います。

お手元の資料の中にいろいろとお話しする項目を並べておきましたが、時間の関係で全部を申し上げることができないようでございますので、この中から選んでお話し申し上げたいと思います。

はじめに

皆様ご存知のように、スウェーデンという国はわれわれ日本人からみると福祉国家であるというイメージをお持ちの方が多いんじゃないかと思えます。それからもう一

つは、余りよくないことですが、フリー・セックス、この二つがスウェーデンと聞いた場合に思い浮かべるイメージじゃないかと思えます。最近スウェーデンに関する情報もかなり多くなってきておりますが、その中味をよくみますとやはりまだまだ誤解されて伝わっている点が多いんじゃないかという気がするわけでございます。特に社会保障につきましては、英国病と並んでスウェーデン病とかいわれ、どうも社会福祉が進むと国民は墮落して、怠けて仕事もなくなる、活力もなくなる。であるからスウェーデンみたいな福祉国家になるのも考えものだというような議論がよく聞かれるわけなんです。もちろんその福祉が進めばある程度そういう点もあるという感じは持ちますけれども、スウェーデンがまさにそうだというのはどうも当たっていないような気がいたします。

最近のスウェーデンに関する日本の新聞の論調をみますと若干ニュアンスがかわってきているように思います。日本もいろいろと経済的に困難な時代に入っておりますので、先進国はどうなっているかということで各新聞社が競って記者を派遣して、それぞれの国の状況をつぶさに見て報告を書

いておるわけなんです、スウェーデンに関してはそのニュアンスが段々変わってきているような気がいたします。やはり日本で言われているのとはちょっと違うんじゃないかという印象をもって各新聞記者も帰ってきておられるような気がします。もちろん訪問する目的が問題点をさぐりにいくということになると、やはり問題点ばかりみてるようになり、これは大変な問題があるということで帰ってくるということになりますが、もう少し別な観点からみると、なるほどすごいわいということにもなります。スウェーデンは昔から福祉先進国家であったわけではなく、福祉先進国家ということが国際的に言われたのは1950年に入ってから、福祉国家と言われるようになったのはここ2、30年のことだと言われております。それまでのスウェーデンは大変貧しい農業国家であったと言われております。その貧しさがどこにあらわれているかと申しますと、1860年代から1910年代までに、生活困難のためになんと、120~130万の人がアメリカなどに移住していたということです。それほど困っていた時代があったわけです。それが現在では海外から逆に沢山の人を受け入れるような国になったわけです。ただ注目すべきことはスウェーデン人自身決してスウェーデンは高度な福祉先進国家だとは思っていないということです。高度先進福祉国家の中味は何かというと、スウェーデン人に言わせれば、物質的にはもちろん精神面においても充実しないといけないのであって、現段階のスウェーデンの福祉というのは、確かに

物質的には世界一といえますか、かなりの程度に進んだけれども、まだ精神面の福祉というのがそれに追いついてない。スウェーデンの三大社会病は、麻薬とアルコールそれから売春なんですけれども、こういう問題も福祉が進んだから起こっているのではなくて、福祉がまだ不十分なために起こっているんだといわれています。このような三つの問題に象徴されるようなこと、これを精神的な問題といっているようですが、こういう問題が片づいて初めてスウェーデンを高度先進福祉国家だと呼んでもらいたい、とよく言うわけなんです。

豊かになった背景

スウェーデンが物質的に豊かになった理由は大きくいうと二つあると思います。一つは天然資源に恵まれていたということです。よく言われますのは17世紀にはスウェーデンには銅が非常に多く産出された、でこのスウェーデンの銅というのは当時のヨーロッパのほとんどの量を占めていたと言われております。18世紀に入りますと、鉄鋼石が産出され鉄鋼石は今でも埋蔵量は500年分もあるといわれています。しかも非常に上質の純度の高い鉄鋼石だということです。それから19世紀に入りますと紙、パルプが非常に盛んになる。今でもスウェーデンでは毎年ものすごい伐採をしているわけなんですけれども、伐採をする量以上のものが成育しているわけです。そして20世紀に入っての電力、水力です。水資源が豊富である。現在国土の、10%は湖です。とにかくいたるところに

湖がある、川もあるということで、今申し上げました天然資源が非常に恵まれていたということです。天然資源の泣きどころはやはり石油がないということです。石油がないというのは日本と同じ悩みで、この石油をほとんど、というより全部を海外から特に中近東に依存しているという点が非常に弱いところでして、これをカバーするために原子力発電所の設置を進めているところです。現在、原子力発電所を13基作るということで計画がたてられていますけれど今働いているのは6基です。

現在のスウェーデンの電力の23%が原子力に頼っているというような状況です。こういう石油の問題もありますけれども概して言えば天然資源に非常に恵まれているというのが発展の原動力だと思います。もう一つは人的資源に恵まれてたということが言えると思います。この人的資源ということについてはスウェーデン人の民族性について少し話しをする必要があると思います。スウェーデン人というのは北方ゲルマン民族です。われわれ日本人がゲルマン人（ドイツ人）というとき非常に優秀だというイメージをもつわけですが、それをさらに優秀化したような民族がスウェーデン人じゃないかと思えます。その優秀な民族が豊かな天然資源をうまく利用したということだと思います。優秀な民族の証しの一つとして科学に非常に強い国民だという感じがいたします。水野肇先生の話が明日あるようですけれども、水野先生はスウェーデン人というのは「科学する心」を持った民族であると言っております。確かに彼の地

に行ってみて、一人一人が非常に科学に対する、まあ別に物理学とか、非常に高等なものじゃないんですけど、非常に科学に対する理解力というのが深いような気がするわけです。皆様ご存知かも知れませんが、中学校か高校で習う元素記号というのがあります。カルシュームとか、ナトリウムとか、カリウムとか、鉄とか、銅とか、そういう元素記号の3割はスウェーデン人が発見したと言われておるわけです。ものすごい学者がいるかといえばそうでもない、いるとすればダイナマイトを発明したノーベルとか、あるいは植物学者のリンネ。リンネという人の弟子にテュンベリーという人がいるんですが、このテュンベリーという人は、日本の植物の分類をやってくれた人なんですが、そういう傑出した人は何人かいますけれども、ものすごくたくさんいるというわけではない。ただ非常に裾野が広いといえますか、科学に対する心をもった人が多いという感じがするわけです。私事で恐縮ですが、私はストックホルムの中心のアパートに住んでおったわけですが、このアパートの大家さんという人は年金をもらっている70才のおばあさんなんですが、アパートの電気がこわれたとかテレビがこわれたとかラジオがこわれたとかいうことになりますとすぐ大家さんと連絡をとるわけなんですけれども、日本だとどうするかというと、大家さんが電気店に連絡して来てもらうということになると思います。ところが大体のことはそのおばあさんがきて自分でやってくれるわけです。電気にさわるといふのはいやというのが一

般的ではないかと思いますが、そういうことをどんどん自分でやっていく。もちろん複雑な故障の場合は別ですけれども、大抵のことは自分でやってしまうわけですね。それからおばあさんでも車を運転する人が多いわけなんですけれども、車がこわれるとやっぱり自分で直してしまうわけです。これはそういうものに対する心というのをもっているためではないかと思つづく感じのわけです。スウェーデン人の家庭の地下にはホビー・ルームというものがあります。スウェーデン語を勉強する時に1から始めるとまず家の構造というのが出てくるのですが、地下に必らずホビー・ルームというのがあるわけなんです。これは何だろうと思っていたわけですが、現実に行ってみて初めてわかったんです。ほとんどの家の地下には工作室があるんです。工作室がありまして、そこでもっていろいろな物を自分で作るわけなんです。もちろん物価が高いというせいもあるとは思いますが、とにかく小さい時から物を作るということに慣れ親しんでおりまして、暇があると必らず工作室に入って行ってやっているわけなんです。私が住んでいたアパートの住民で元気なおじいちゃんがいました。その人は昼間は働いておりまして、夜成人教室なり老人教室に行くわけなんです。そこには30種類のコースがありまして、一番多いのが語学なんです。英語とか、フランス語とか、そういう語学関係のコースが多いんですが、その他に手芸とか、工作等があり、この中にバイオリンを作るコースがあります。そのバイオリン作りを一生懸命学校で習ってき

て、今度は自分の家にもどってきて自分の家の地下室で一生懸命作るんです。大体完成するまでに2、3年かかるわけなんですけれども、物を作るというのはそういうところにはっきり出ているわけなんです。これは1つの例ですけども、人的資源の中で非常に科学に強いということを特色として申し上げたかったわけです。でこの天然資源と人的資源の他に実はもう1つ強調しなければいけないのは、連帯性があるということです。スウェーデンに行きますと、連帯、連帯ということが新聞にも、何にでも出ております。英語ではSolidarityと言いますけれどもこの連帯性があるって初めてまとまっていくんではないだろうか。社会福祉とか、社会保障というの、実は連帯性がなければまとまらないわけですね。一つの例として日本の場合年金制度が、8つか9つあります。またその内容もバラバラで給付の内容もいろいろと差があります。これを一緒にしようとするとなかなかむずかしいわけですが、スウェーデンでは年金制度が一本の制度になっております。なぜ一本の制度になっているかという、別の理由があり、これはあとで申し上げますがやはりそれができた背景には国民の連帯性というのがあったと思います。国民が一つになる、一致団結するという精神が背景にあるわけです。選挙の際には必ず連帯性がなくなったとか言われますけども、スウェーデンの場合は、ほんとうの意味で今まで連帯性があったといわれるわけです。それがだんだん薄れてきているんじゃないか、こういうことが言われています。それでも

日本と比較しますと、まだまだ連帯性があると思いますし、一つのことをするに、他人の足を引っばって、それをおさえるようなことはしない。ほんとうにいいものであれば皆が一体となってそれを押し進めようというような雰囲気があるんじゃないかと思います。とにかく連帯性というのがある。

以上述べた天然資源，人的資源，連帯性，この3つが今日のスウェーデンを築いてきたんじゃないかと私は思うわけです。

スウェーデンという国

スウェーデンの社会保障の中味に入ります前に、スウェーデンの概要みたいなこと若干申し上げておきたいと思います。スウェーデンといいますのは、人口が僅か828万人、東京都よりも小さな国です。ところが国土面積は45万平方キロといえますから、日本の37万平方キロの1.2倍もあります。非常に広いところに少ない人口。ですから人口密度が僅か20人です。気候については若干特色があります。もちろん北の国でありますから寒いわけですがけれども、日本で考えられているほど寒くはございません。大体北海道位の感じだと思います。一つ非常に日本と違いますのは、湿気が非常に少ないということだと思います。湿度が非常に低いわけです。夏30度位の温度になりましても、背広を着ても快適です。また洗濯をしても、洗濯物は2～3時間もすれば、しかも家の中に干しておいても乾いてしまいます。あるいは馬の糞でも、牛、馬の糞が街路にあっても見るまに固まっています。1時間もすれば石みたいに固く

なります。布団などは、人間が寝ていない限り乾いているような状態で、外に干す必要がありません。ワイシャツなどは、日本では一日と着ていられないと思いますけれども、3,4日着ても何ともないというような気がします。湿気が少ないということは、まずい点もあるわけですがけれどもこんなにプラスになる面もあるものかということをつくづく感じたわけです。次に国民性なんですけれども、一つは先ほど科学に強いということを申し上げましたが、この他にもう一つは国際的な問題に非常に関心をもっている、国際性の強い国民じゃないかという感じがする点があるわけなんです。これは一つは「衣食足りて礼節を知る」じゃありませんけれども、かなり裕福な社会になってくるとこんなにも余裕ができるものかという一つの例みたいなものじゃないかと私は思います。例で申しますと、海外援助ですね。低開発国や、第三国に対する海外援助ですね。これが非常に積極的に行われているわけです。余談ですがけれども、日本の場合いろいろな援助をするという場合に、どういうことをするかというと、日本の外務省は、全世界にある日本の大使館に電報を打つわけです。お前のいる国は、どの位援助金を出すかということによって全部調べまして、それで全部情報が集まってから、日本としてはこの位が一番いいじゃないかということで、相当期間が過ぎてから援助金を出すわけです。スウェーデンの場合はどうするかというと、他人に聞くことは一切しなくていいですね。自分で必要だと思ったら必要な額をその場で出してしまふわけです。日

本のように行政機構が複雑じゃないし、人間関係が非常にあっさりできてますものから、手続が非常に簡単です。ですからどこの国に台風が起こったら次の日にたとえば100万ドルなら100万ドルを出してしまいます。日本の場合は6カ月後に100万ドル出します。よく国際的な場面で言われるのは、「遅れた援助というのは援助のないのと同じだ」ということなんですけれども、ほんとうに困った次の日に100万ドルもらったのとそれから6カ月後に、世界何10カ国から集ってきたときに同じ100万ドルもらったのではありがたみが全然違うと思います。これは当然な話だと思いますけれども、一番最初にやるのはやっぱりスウェーデンなんですね。しかもどんどんやるわけです。今、世界中でGNPに対して援助額が1%越えているのはスウェーデンとオランダしかないと思います。またこの援助の仕方がスマートです。日本の場合は、余り悪口を言っちゃいかんかも知れませんが、援助をするとなると、これで日本の物を買えという、いわゆる「ひも付き援助」をするわけです。結果的には日本にもどってくるようになっていくわけです。スウェーデンの場合はひもを付けないわけです。援助金でどんな物でもいいから買いなさいということになるわけです。ですから低開発国は非常に喜ぶわけなんです。そういう考えが何故でてくるのかというと、自分の国のことを考えたというよりは、やはり世界全体が良くなるとだめなんだという、何か世界全体を良くしようという義務感みたいなものを持っているわけなんです。

すね。ただスウェーデン1国の力で世界全体がそんなによくなるわけありませんけれども、どうも一人一人の国民の話を聞きますと、見かえりを要求しているのではなく、やはり困った人には手をさしのべる、それでもって世界全体がよくなればいいじゃないか、こういう考え方をとっているように思えてならないわけです。そういうことで第3国や発展途上国からいろいろ喜ばれるものですから、信任が厚い。一方超先進国家ですから、他の先進国家である日本とか、ドイツとか、イギリス、フランス、アメリカ等からも一応信頼されているわけです。このようなことがあるために国際会議の場でスウェーデンが議長国になる例が非常に多いわけです。両方から信頼されておりますから、そういうことでなっているわけですね。スウェーデン政府としては意識的に国際人を要請するということを心がけておまして、小学校3年から英語の義務教育が行われています。スウェーデン語という言葉があるんですけども、小学校の3年生から英語の義務教育が週3時間、4時間行われておりますので、大体小学校を卒業する頃になりますと、普通のことはしゃべれるようになるわけですね。スウェーデンに行かれた方もあるかも知れませんが、スウェーデンでは一部のおばあさんとか、おじいさんを除けばほとんどの人が英語を話せるのではないかと思います。このように国際人の要請を心がけておるわけですね。もう一つ国際性という点で申し上げたいのは、国際養子縁組です。国際養子縁組というのが非常に盛んなわけです。

もちろん国内の養子縁組も盛んなんですけども、スウェーデンの場合の養子縁組あるいは里親というのは、子供がある人あるいは子供があった人になるわけです。つまり自分の老後を見てもらうというような動機は全くありませんで、とにかく子供のために制度を作っていくということがはっきり出ています。それはどこに表われているかといいますと、1つはやはり里親や養子縁組というのは子供がある人になっている。子供がある人は子育ての経験があるわけですから、その経験をもとに預った子供を育てられるということであると思います。もう一つここで申し上げたいのは、それが国際的に広がっているということなんですね。やはり低開発国、発展途上国の子供達は非常に困っているわけなんです。その子供達を積極的に養子縁組して育ててあげようということなのです。今養子縁組の対象となる子供が一番多いのが韓国人です。韓国、タイ、ビルマ、インドネシア、フィリピンそれから南米、アフリカなどからの養子縁組が多くなっています。よくストックホルム市内を歩いておりましたぶつかる光景は、自分の子供、その白人の子供ですね、その他に韓国人の子供、それから黒人の子供、こういう子供を三人つれて歩いている光景です。これらを見ましても、我々日本人の感じからいうと、何故そこまでしなければいのかという疑問があると思いますね。それをスウェーデン人は、スウェーデンというのはそういうことをやらなければいかにんことを政府レベルや地方公共団体レベ

ルだけでなく、個人個人のレベルにまで及んでいるのではないか、こういう感じをもったわけです。余談ですけども、この東京にあるスウェーデンの大使館には外交官が10人ほどいますけれども、その中には韓国の人を養子にもらっている人が結構おります。そういう国なんですスウェーデンは。

クールな人間関係

次に人間関係についてお話したいと思えますけれども、人間関係が非常にクールにできているという感じがいたします。まあ一言で言うと、さっぱりしているわけですね。さっぱりしている。なんかどろどろしたものがない。そういう感じがします。一つの例として私が滞在中に経験したのは、特に夫婦、男女間の人間関係です。

ある有名なAという人がおりました、そこに子供が3人ほどいたわけです。その人の友達にこれまた有名なKという独身の人がいたんですね。そしてどうもそのAの奥さんがK氏の方がいいと思ったんでしょうか、離婚してしまったわけです。女房を取ったというような感じになるんじゃないかと思います。しかし、驚くべきことに結婚して、再婚した女性の方が相変わらず前のAと付き合いを続けるということなんですね。何かどうも、そのどろどろしたといひますか、じめじめしたといひか、そういうところがなくて、非常にあっさりしているところがある。もちろん、こういうことがいいということではないんですけども、老人たちはやはり顔をそむける人が随分多

いわけですけれども、ただそういうことがあっても社会的地位を捨てなくてもいいっていいですか、そういうことが認められるような雰囲気というものがスウェーデンにはあるのではないかと思います。1つの例ですがそういうようなところがあるわけですね。それからもう一つ非常にいいと思いましたがのは役所と役所あるいは役所と企業との関係が非常にクールなんです。たとえば一つのことをするにも全部電話で処理してしまうわけです。日本だとむしろ電話では失礼だから、行って何か挨拶をすとか、あるいは何事をするにしても、ちょっと挨拶をしておかないと、あとで足を引っぱられるとか、こういうところがあるってなかなかうまく進まないところがあると思います。日本では日常生活の中ではそういうことが多いものですから、またそういうところにエネルギーを沢山使っているものですから、一見ものすごく忙しそうに働いているようですけれども、生産性からいって決して高いとは言えないと思います。そういう点、何か考えていかないときたるべき高齢化社会に対応できないんじゃないかという感じがするわけなんです。

社民党政権の崩壊

それから、国会の関係をちょっと申し上げたいんですが、国会は一院制です。前には二院制だったんですけれども、同じことを二回やるというのは無駄じゃないかということで、今から10年前に一院制になりました。また国会議員の選挙のやり方が完

全に政党に比例する制度になっております。全国に選挙区が28ありましてその中で投票は政党にするわけです。もちろん人の名前を書いてもいいんですが、一応政党の名前を書いておかなければいけないわけです。ある選挙区の定数というのは、完全に人口に比例することになっているんですね。この定数が決まったあとそれぞれの選挙区で各政党にどのように配分されるかという次のようになっているわけです。たとえばストックホルム県なら県で30人の議席があるということになりますと、その中でA党がその50%の投票数を得る、B党が30%、C党20%ということになりますとその30議席を50対30対20にとっていくわけです。それじゃどうやって各党の人が選ばれるかという、各党に全部名簿ができてまして、ある党がたとえば50%とれたなら、上から何人目まで、即ちこれこれの人々が議員になりますよという表を作っておくわけですね。

それで決っていくわけなんです。ですから選挙の時に選挙運動というのは、各党の党首ぐらいしかやっていません。個人ではほとんどやりません。各党の党首がすべてやる。こういう形になっているため選挙費用はいらない。個人個人の選挙費用はいらないわけです。むしろその各党の中で、いかにして自分が上位ランクに位置付けてもらうかということ、各党の中でのお話ですけども、が大変なことになるわけです。国会の定数は従前は350人でした。そして与野党が相拮抗しておりまして175対175だったんですね。けれども大体重要

事項で意見が分かれるときには175対175になるということが多いんです。そういうことが多いんです。そういうときはくじで決めていたわけです。くじ引きでもって重要な政策が決っていくということがありました。しかし、そういうことはおかしいということになりまして、350を349にかえたという経緯があります。今は175対174でたった一票違いで、いわゆる保守政権が続いているわけです。地方組織は従前は日本と同じように、県があって市町村があるという2段階になっていたんですが、1971年に市町村の区別を廃止しまして、今ではコミューンと呼んでおります。県あるいはコミューンがどういうことをするかというと、県というのは医療関係を担当するということになっています。県の才出予算に占める医療関係の費用というのは80%です。他の費用は僅か20%ですからスウェーデンの県というのは、病院なり、医療のために存在しているといっても過言ではないわけです。病院というのは全部県立病院です。個人の病院というのは、ほとんどありません。それから、コミューンは何を担当するかというと福祉関係を担当するわけです。福祉関係は県は一切やらないんです。コミューンがいろんな社会サービスあるいは福祉施設の設置、これを全部やることになっているわけです。ですから国からの補助金の流れも、県を通じることはなく、国から直接コミューンにいくという格好になっているわけです。もう一つコミューンの役割は教育です。日本の小学校、中学校にあたる義務教育、それから幼稚園ですか、そう

いう教育関係の重要な役割を担っております。

先ほどスウェーデンの発展の理由として、3つほどあげましたけれども、もう一つ重要な要素があるとすれば、やはり地方公共団体の独立制といいますか、地方分権を進めたということがあげられるのではないかと思います。地方公共団体だけではなくスウェーデンにおいては各機関が相互に独立しております。いろんな通達等も流れますけれども、それは一つの参考であって、最終的には全部コミューンなり県が決定することになっております。ただし病院関係だけは例外でして、これは中央集権的色彩が強くなっています。

1976年にそれまで44年間続いてきた社民党政権が倒れまして、保守政権に変わりました。これは日本でも非常に大きく報道され北欧型福祉国家は行き詰まったということで紹介されました。日本の新聞で言われたことは福祉国家に対する不満とか福祉のいき過ぎとかいうものであったわけですが、現地でみる限りではそういう議論はいささなかつたと思います。むしろ別なところに理由があったんですね。

一つは原子力発電所の問題があったわけです。設置の可否をめぐる問題です。

もう一つはテキストに書いてありますが、従業員基金制度と共同決定法をめぐる問題があったわけです。前者は従業員基金といって労働組合が会社の株を持ち株式を通じて影響力が行使できるようにするという構想です。各会社は利益の一定割合を従業員基金に拠出しなければならないというものです。そしてそのための法律を作ろうとい

うことなんです。毎年毎年会社はその利益の数%をその基金に払い込まなければならぬわけです。その基金をどうするかというと、その基金でもって会社の株を買います。そうすると、だんだんその基金の株数が多くなって、ある場合にはその企業全部を支配できるという形になるということです。もしこれが認められると労働者にスウェーデン中の会社が乗っ取られるという危機感が国民の間に広がってきたというのが、実は今考えてみて一番大きな理由じゃなかったかといわれているわけです。社会福祉の関係では、ほとんど問題になることはありませんで、むしろ国民は社会福祉の関係では変わらないということを知っていたからこそ保守政権を選んだというふうに言われております。私もそういうように考えております。その後の経緯をみますと、社会福祉、社会保障というのは進んできておりますのでやはりそういうことではなかったかと思っております。ただ新旧両政権でどういうふうに変ったかということがよく言われるんですが、大きな変化はなかったということなんです。何か変わったものがあるんじゃないかということをおいひつめますと、二つの答えがかえってくるわけです。一つは選択の自由というのか、選択の幅というものが大きくなってきたんじゃないかということです。

今までの社民党政権は、革新政権であるために一つのことを決めてしまおうとしゃにむにそちらへいってしまう。ところが、人間の要求というのはいろいろなものがあるものであって、選択できるようにすべきじゃな

いかということなんです。一つの例として保育所があります。保育所が必要だということになるとどんどん保育所を作ることになる。ところが人によっては自分で子供のめんどうみたいという人もいるだろうし、そうすると別な選択というものもあるのだからいろんなメニューを用意すべきではないかということになるわけです。この選択の自由と言いますか、選択の幅が広がってきたということの一つの政策上のちがいだという人がございます。それからもう一つは、事前予防の徹底ということなんです。これはつまり今までの医療等を考えてみますと、病人が出ると、それらの人の病院を作らなきゃいかんとか医師を養成しなきゃいかんとかいうことで何か需要というものが前提としてあって、それに対して、いかにして需要を満足させるようなものを作っていくか、整理していくかという議論が今までの議論であったというんですね。それが保守政権になると、もっと事前予防を徹底しなきゃいかん、つまり需要に対して何かするのではなくて、需要そのものをなくするようにする必要があるということになったわけです。病院に行かなくてもいいようにするとか医者にかからなくてもいいようにするとかそういうような方向にもっていくべきではないだろうか。こういうことを言うわけです。新政権になった直後に、私がたまたまあちらの厚生大臣と会うチャンスがありました。スウェーデンでは誰でも簡単に大臣に会えるんです。会った時に今述べた2つのことをいっておられました。さらに自分（大臣）は家から歩いて

30分かかるが毎日歩いて通っているし、さらに国民に自転車に乗ることを奨励するというようなことを、かなり強い調子で言っておりました。その方がむしろお金もかからないですむし、長い眼で見た場合そういうことの方が重要であると言うわけです。以上の二点のちがいは実はそれほど変わっているわけじゃないんです。正直言いまして、事前予防というのは前から言われてきているし歴史の流れだと思えますので、別に真新しいことじゃない。それをことさら取りたてて言っているところに、むしろ違くないということ逆を証明しているんじゃないかとかこういうことを感じたわけです。

政策決定のクライテリア

スウェーデンという国は、ある意味では非常に単純にできておりまして、物事を判断するクライテリアというのが三つあります。その一つは、完全雇用ということ。二つは平等主義ということ。三つ目は国防です。完全雇用、平等それから国防、実はこの三つがスウェーデンではあらゆる政策を選択する際に一つの重要な基準になっているわけです。完全雇用というのは、雇用なくして人間の幸せというものはない。労働なくして生活というものは成り立たないという考え方です。どんなことがあっても、まず完全雇用ということを最優先に取り上げるということなんです。私が滞在している間に面白いことがありました。南米のチリー政権に世界銀行が融資をするということでその融資の源資をスウェーデンに求め

てきました。チリー政権というのは軍事政権です。スウェーデンとしては最も嫌う政権なんです。そのチリーに世界銀行を通じて貸付けることがそのスウェーデンの雇用の確保に結びついてるということがあったんですね。いろいろな議論がありまして、どっちを取るかということになったんです。そのチリー軍事政権を応援するかあるいは完全雇用を取るか。その時どうしたかというところ、やっぱり雇用の問題の方が重要であるということになりまして、融資をしたという話がありました。とにかく完全雇用というのがまず第1に重要なことであるということなんです。

第二は、平等ということなんです。この平等ということも重要なんです。Aという政策とBという政策を比べてどちらがより平等化に結び付くかということを決めていくような組織になっているのです。この平等の中には、経済的な平等があります。それから男女の平等があります。スウェーデン人と外国人との平等というのがあります。とにかくこの平等が重要である、しかもこの平等が形式的な平等でなくて、実質的に平等でなくてはいかんということなんです。法律の前で平等ということだけでなくて、本当の意味で平等でなきゃいかんということになります。この平等というのはかなり徹底しておりまして、今スウェーデンではほんとうに裕福な人もいなければ、貧乏な人もいないというような状況になっております。国防については省略いたします。

このように三つの基準というのがありま

して、非常に哲学がはっきりしているという感じがします。

社会保障の特色

さて、スウェーデンの社会保障に入りたいと思うんですけども、スウェーデンの社会保障の特色というのは、大きく言うと三つあるわけなんです。一つは普遍主義という考え方でありまして、それから第二は完全保障主義という考え方、第三番目は、公立主義という考え方です。まず第一の普遍主義ということですが、これはどういう考え方かといいますと、社会保障の議論をする際にすべての人に適用するのか、あるいは一部の困った人にだけに適用すればよいのかという議論がよくなされるわけなんです。普遍主義というのは、すべての人に一律平等に無差別に社会保障制度を適用するという考え方なんです。これに対する言葉としては選択主義というものがあるんですけども、これは特に困った人を対象とした政策を進めていくという考え方であるわけなんです。スウェーデンの考え方は、前者の方の、すべての人を無差別平等一律に対象とするという考え方を取っているわけなんです。スウェーデンの各種制度が、いろいろ制度がありますけれども、その法律の名前、制度の名前の頭には必ず普遍という言葉が付いているんですね。スウェーデン語では *allmän* というんですけども、英語で言うと *general*、まあ日本語で言うと、一般とか、普遍的という意味なんです。こういう言葉が全部付いています。たとえば一般医療保険、一般児童手当、一般何々と

なっています。これはどういう意味かというと、この制度はスウェーデン国民であれば、もちろん一部外国人も入りますがすべからずこの制度を適用するという意味なんです。スウェーデンの社会保障の一つの大きな特色は、この *allmän* にあるというふうに使われています。

それから、もう一つは完全保障主義。これはたとえば、社会保障を受けなきゃいかんという状態になった場合に、どの程度のものを保障してやるかということに関する考え方ですね。完全保障というのは、できるだけ前の所得と同じものを保障してやろうという考え方だと思います。これに対しましてもう一つの考え方は、最低保障主義という考え方だと思います。これは制度としては最低限度の保障をしてやればあとは自助努力でもってプラス・アルファは確保するという思想なんです。スウェーデンの場合は完全保障主義ということとにかく前の状態とできるだけ同じものを保障してやるという考え方にたっているんです。どういうふうにこれがあらわれているかといいますと、傷病手当というのがあります。傷病手当というのは健康保険制度の中にあります。これは日本でも同じです。これの手当額がスウェーデンでは従前所得の 90% なんです。従前の所得の 90% を保障してやるということなんです。日本の場合はこれは家族構成によっても違いますけど、60% です。60% というのは ILO の最低保障に関する条約に定める基準が 60% であるためその 60% をとっているわけなんですけれども、スウェーデンの場合は、最低

ではなくて完全でなきゃいかんということになっている。100%にしたいところだけれども財政的な問題もあって90%ということになっております。労働災害のために休まなければいけなくなるというような状態になりますと、これが100%です。労働災害で休んだというような場合には、従前賃金の100%保障してやるという考え方は、日本に置き換えて考えてみますと、働かないで100%もらえるなら、働いて100%もらうのとどっちがいいかということになり、これは働かないでもらった方がいいんじゃないか、こういう発想にすぐつながる、ですからこの100%をやる、90%やるというのは自助努力に水をさすという議論がいつも出てきます。これについてスウェーデンの担当者に聞きますと、そういうずるい考えというのが、もちろん人間として当然あるわけなんですけれども、そういうことは非常に少ないというんですね。むしろ人間の善性を信頼した制度になっています。つまり100%を保障する。90%を保障するということは、それでもって一生懸命早くなおって一線に復帰したい、こういうことを早くさせるために十分なものをやっているんだという形になっているわけですね。とにかく悪いことはしない、もちろんする人もいますけれども、むしろ悪いことをする人のために歯止めとか、制限とか、あるいは押えるということになると、善良な人に対する権利の侵害みたいなことになる。だからそういうことはしないんだということを使うわけなんです。そういう特色があるわけです。

それから第三番目の公立主義、原則として、病院は県立病院、福祉施設はコミューン立ということになるんですけれども、これはどういうことからくるかという、先ほど平等主義ということを行いました、全国どこにいても同じような内容のサービスというものを受けられなければいかん。もしそうでなければこれはやはりスウェーデンの平等主義、一つの大きな柱として考えております平等主義に反する。ですからすべて公立でもってやらなきゃいかんということなんです。それで病院というのは、全部と言いますか、ほとんど県立病院です。国立病院が2カ所ありますけれども私立病院というのはほとんどありません。それから福祉施設も全部市町村立になっておるといような格好で平等ということをこれによって保障しようという考え方になっているわけですね。

スウェーデンの福祉哲学

さて先ほどスウェーデンの社会保障というのは誤まって伝えられているんじゃないかということをお願いしましたけれども、スウェーデンにははっきりとした福祉哲学みたいなものがあるような気がいたします。それは第一点は「天は自ら助くる者を助く」と書いておきましたけれども、これは日本でも福沢論吉が言っておりますことわざと同じなんです、福祉というのは、中味をやることじゃないということなんです。条件作りなり、その外枠作りをやるということじゃないだろうかということを使うわけですね。たとえば母子世帯を例にとってみると、母

子世帯というのは稼得能力が弱い。だからお金をやって、それでもって生活しなさいということになりがちである。しかしこういうことではだめだというんですね。母子世帯も普通の人と同じように働いて所得を得る、その所得でもって普通の人と同じような生活をする、そうあるべきだというわけです。これに対してお金をやるということは非常に簡単なことです。しかしお金をやっても、それを使ってしまえばおしまいだし、長い目で見た場合には自立につながらない。むしろ相手からはどんどん要求が出てきて、10万円で足りなければ12万円、12万円で足りなければ15万円と要求というのは際限なく広がる。同じお金を使うならこのような使い方をするのではなくて、むしろ母子世帯が労働できるようにする、労働して、所得を得られるようにする。その所得でもって生活をできるようにする、そうしますと普通の人と何んら変わりのない生活ができるようになる。従って福祉というのは、決して中味を直接やるということではなくて、外枠とか、条件作りをやる、これが福祉の内容じゃないだろうか。こういうことを一つの哲学として持っているわけです、ですからこの2番目に自助努力が大前提と書いておきましたけれども、自助努力を阻害するような制度というのは、やっぱり福祉制度としてはまずいということをはっきりいっているわけです。自助努力と言え、こういう例があります。ホームヘルパーを老人世帯に派遣する。ホームヘルパーが行って何をするかというと、普通は買物をしたり、洗濯をしたり、料理を作

ったりする。その間老人は何をするかというと、黙って座ってテレビなんか見ている。しかし今後のホーム・ヘルパーというのはこれではだめだというわけです。ホーム・ヘルパーが一人で買物に行ってくる、一人で料理作ってしまう、一人で洗濯をするということだと自分（ホーム・ヘルパー）のペースでどンドンどンドンできますので非常に簡単なわけです。ところが、それじゃその老人は何だろうかということになる。おばあさんも自分で買物もできる、自分で洗濯もできる、自分で料理もできる、一人でできるように指導するというのがホーム・ヘルパーの役割じゃないか。始めから中味を全部自分でやってしまうのは簡単なことだけれども、そんなことやっていたら何人ホーム・ヘルパーがいても足りない。おばあさんにずっと付ききりになってしまう。そうではなくておばあさんが一人で行けるように、一人で料理できるように、一人で洗濯できるように、手取り、足取りして教えなきゃいかん。その時は確かに大変です。自分で一人でやるよりはものすごく時間がかかると思いますけれども、しかし長い目で見た場合には、そのおばあさんが一人で生活できるようになる。それが非常に重要だということなんですね。福祉というのは、そういうようなことを頭に入れてやるということを一つの哲学として持っている。考えてみれば、これは日本だって全く同じようにあてはまるわけだし、今さら言うまでもないわけですが、ややもすれば、日本の福祉はどうも内容をやりすぎたというような感じがしないでもないと思

わけです。福祉の見直しと言われるのもこういうところが一つの大きなポイントとして考えるべきじゃないだろうかという感じがするわけです。

次にすべての施策の中に福祉施策の *built in* ということも重要な考え方になってきています。福祉政策というのは、それだけが一人歩きするものではないという考え方ですね。老人も、障害者も、そして母子世帯も一般の人と同じように生活できるようにするためには、やはりそれ相応の社会的な条件とか、物理的な条件が整わなければならないわけですが、それを福祉サイドで、福祉ということだけでやったんでは、全然効果が上がらない。たとえば老人の職業の問題を取り上げてみても、老人だからといって福祉でやるということになると、それはもう取って付けたような老人雇用になる。あるいは障害者の雇用を取りあげても、民生サイドが取り上げて、それは気休め的な、取って付けたような感じになるわけです。老人や障害者や弱者に対する福祉というのは、実は雇用政策であるし、教育政策であるし、そして都市政策であると思うわけです。それをたとえば都市計画についてみると都市計画を策定するサイドで作ってしまって、そのあとで老人のために横断歩道を少し考えたものにする。あとで福祉サイドが考えるということが今までの考え方であったと思います。そうではなくてやはり都市計画なら都市計画の中で始めから老人とか、障害者とか、そういう人を頭に入れた、組み込んだ格好でやっていかなければいけないということなんで

すね。日本の道路はよく掘り返されて、ガスが終わったら電気、電気が終わったら水道と何回も何回もやっているところによく出会います。これに似ているわけですね。そうでなくて、やはり始めから障害者の雇用、老人の雇用なら、雇用政策の中にはっきりと位置付けする。それから都市計画、都市の構造という問題で障害者の問題があるなら福祉サイドで考えるのでなくて、はじめから道路を作るサイドでそういうものを全部考えなきゃいかん。こういうことをいうわけです。まさに私もそれはそういうことじゃないかという感じがするわけです。一つの例として、スウェーデンのストックホルム市内には70余カ所の地下鉄の駅がありますけれども、地下鉄の駅を作る時には必ず障害者、老人、あるいは乳母車、子供のための設備を整えるようにしている。たとえば道路から必ずエレベーターで地下のホームにまで下りて行けるようになっておまして、ほんとうに何でもない道路のそばにエレベーターのための四角の箱があります。ボタンを押すとそのドアがあいて、そこに車椅子の人がそのまま入っていき、そしてまたボタンを押すと地下ホームまで行くというシステムになっているんですね。こういうことをしないで、もしあとで地下ホームにもエレベーターがあったらいいなということになりますと、大変な工事になると思うんです。それを始めから駅は、障害者も、老人も、乳母車も使うという前提ですべて折り込み済という形でやっていくという考え方になっているわけですね。70余カ所のうち、ないもの10カ所

ぐらい除いて、60か所全部そういうエレベーターが付いているわけです。そういう哲学をはっきりと持っていることだと思えます。

それからカッコ(3)に実質的な平等化の実現をと書きましたけれども、先ほど言いましたように、社会福祉、社会保障というのは平等化の一つの手段だという考え方だと思えます。これは *normalization* という言葉で表わされるように一つの手段なんですけれども、逆にいいますと、障害者、老人というのはやゝもすれば、老人だから、これこれをもっとプラス・アルファしてやらなきゃいかん、障害者だからこれにプラス・アルファしてやらなきゃいかんということになりがちなんです。しかし平等というのは、プラスでもマイナスでもないということなんです。以下であってもいかんけど、以上であってもいかんという考え方をもっているわけです。日本の老人医療の場合には、一般の制度にプラスして自己負担分を全部出してもらおうという格好になっているという形なんですけれども、それがスウェーデンではないんですね。よく聞かれるのは、障害者、老人には特権はない、ということです。まあ別に特権を要求しているわけではないと思えますけれども、とにかく一般の人以下であってはいかんけれども、一般の人以上であってもいかん、それが取りも直さずノーマリゼーションだということを言うわけです。

中央集権的な医療制度

さて、もう少し具体的な内容で、特にトピック的なものを申し上げたいと思うんですけれども、5の方でスウェーデンの社会保障の内容ということで医療をあげてごさいます。実はこの医療に関しましては特色がいくつかあります。それは先ほども申し上げましたけれども、スウェーデンの場合は一般に地方分権が進んでいること、またこれが今日のスウェーデンの発展を築いてきたと言われるわけですから、その例外が実は医療の問題にあるんです。病院を設置する場合は仮に、地方公共団体、県が全額自分の金で設置する場合にも、社会省と言いますか、実は社会省の下に社会庁という実施機関がありますが、この社会庁の許可が必要であるということです。別に国庫補助がつくからでなくて、国庫補助がつこうがつくまいが、とにかく病院の全国的な適正配置ということから、社会庁が許可を与えることになっている。それは、病院の機能がいいとか、悪いとかいうことでなくて、全国的な配置を見るために許可をするわけです。ですからある地域で多すぎるとそれは認められません。もう一つ重要なことは職員ですね。お医者さんです、このお医者さんの配置について全部社会庁が計画をたてることになります。医学部を卒業して医師の試験を通過して、個人の病院、開業医となる人はほんの5%位であり、あとは全部県の職員になるんですけれども、有無を言わせず全国に配置するようになっております。お医者さんに希望は認めないという形になっております。人権的な問題とまさにすれすれの問題なんですけれども、人

権の問題と、それから生命にかかわる医療の水準を全国に均等に配分するという問題がございます。どっちが上かという判断から、これはやはり後者だろうという考え方のもとにお医者さんの配置というのを全部社会庁が握っているわけです。そのかわり給料については卒業年次が同じであれば全部同じようにしてあるんです。これは他の政策が地方分権的であるのとまさに逆の点です。全国どこに行っても同じ質の、同じ内容の医療が受けられるということにしてあるわけですね。とにかく私も何か所か病院をまわって見ましたけれども、大体大きな病院です。最低500床位。1000床位というのがざらでございます。そういう大きな病院でございませけれども、問題になっておりますのは、自分で好きな時に行けないということです。すべてappointmentをとって行くわけなんですけれども、約束をする際その病状を聞かれる。そうしてたいしたことがないと思われると2週間後に来なさいということになる。2週間位待つのが普通なんです。そのうちにほとんどの人はなおってしまうわけです。よく皮肉に言われるんですけれども、スウェーデンでは2週間待っても大丈夫な人が初めて病院に行けるといいますね。そういうことが言われるわけです。もう少し気楽に病院にかかれるようになれないものだろうかということで今大激論がなされています。しかし、お医者さんに聞きますと、病院に来る人のほとんどが来なくていいような病気で来ておると、こう言うわけなんです。それからこれは余談ですけれども、医療機関

は先ほど言ったように県立病院ですから、コンピュータで1カ所に全部データを集めております。各県ごとですけれどもたとえば、ストックホルム県ならストックホルム県で150万人の人口がありますけれどもその中に30カ所位病院があります。そしてある1カ所だけを一番中心の病院に指定しておきまして、データ関係を、そこに150万人の医療関係の情報を全部入れておくわけですね。大体病院の管轄というのは全部決まっているわけなんです。この地域の人はこの病院と全部決まっています。先ほど言いましたように、どこの病院に行っても質は同じでございませから、ある特定の病院に集中して、こっちは暇、あっちは忙がしいということのないように、全部管轄が決まっています。もちろん緊急の場合は管轄外の病院に行ってもいいんですけれども、普通の場合は全部管轄が決まっています。ストックホルム県の場合ある1つの病院にその150万人分の情報が入っております。ある人の病歴は何かとかあるいは両親はどういう病気で死んだとか全部わかるようになっています。各病院にはターミナルがおいてありまして、国民総背番号制をとってありますので、その人の背番号のカードをとって見ると全部本人及び家族の病歴が出てくるシステムになつてるわけなんです。日本人も結構見に行って、感心して帰るシステムなんですけれども、実はプライバシーとの関係で最近問題になっておきまして、国民総背番号制を廃止しようじゃないかという議論も出てきております。

自己負担の大きい医療保険

次はいわゆる病気になる場合の医療保険ですけれども、これについて日本に誤って伝えられておりますのは、スウェーデンでは何んでもかんでも只だということだと思えます。しかしそうではありません。非常に自己負担額が大きいのです。レジメに書いておきましたけれども、通院する場合には一回について25クローネ、1クローネは現在の為替換算でいっても50～60円の間ですが、50円としても1,300円。1,300円一回ごとに取られます。ですから一週間行ったら7,000円とか1万円になるわけです。それから入院する場合には一日40クローネ、2千数百円取られます。一カ月入院していれば6万円前後になりますから、結構大きい額です。それから歯科ですね。歯の場合、日本の場合は本人全額、家族の場合7割、国保の場合本人、家族とも7割になっておりますけれども、スウェーデンの場合は半額しか保険ではみられません。半分は自分で出す、こういう形になっております。それから薬代は25クローネまでが自己負担になっております。こういうことで結構自己負担額が多いわけなんですね。これがスウェーデンに皆さん来られて一番びっくりするところなんです。

国民に一本の年金制度

年金につきましては、これは先ほど言いましたように国民に平等な給付内容でなければいけないということから国民に対して一本の制度になっております。その内容は二段階になっておりまして、一つは基礎年金

(AFP)とよばれるものでこれはスウェーデン人であれば誰でも最低が支給されるというものでございます。現在月額1,584クローネ、これは独身の場合で大体日本円では8万円位になると思えます。夫婦の場合は2,784クローネ、日本円で14万円位です。実はこれは最底の額なんです。スウェーデン人であれば誰でもこれだけは最低保障されるという額なんです。普通の人はその他に次に述べます附加年金(ATP)というのがあるわけなんですね。これは働いている人については、従前の所得の60%を保障してやりましょうという制度なんです。この基礎的な部分、附加的な部分と合わせまして、大体従前の所得の70から75%を保障するようになっているわけです。ATPの従前所得の60%と言いますのは、保険期間というのがありまして、一応30年間働いた場合の期間でございまして、ですから30年に満たない場合には30分の1ずつ減額される形になっております。とにかく基礎年金と附加年金を加えまして、大体従前の所得の70から75%が年金で保障されております。基礎年金、附加年金が全国一律の一本の制度になっているということが一つの特色ですし、この2段階構想というのは、実は日本も一つの手本としておりまして、日本政府の社会保障制度審議会でも、こういう形にもっていきべきだという意見具申をしたということを知っています。それからもう一つの特色は、段階的退職のための年金ということなんです。これはどういうことかといいますと、人間というのは、一生懸命働いていてある時退職して

パタッと仕事をやめ、翌日から暇になって何もする事もないということになりますと、その間にはものすごい落差がある。そうしますとある場合には病気になる人もいる、ある場合には極端な場合は死んでしまう人だっているということ、この退職というのをもう少し段階的といいますか、徐々にといいますか、自然な格好で、次第次第に退職していくという方法がとれないものだろうかということ考えたわけです。同時に退職していくなら年金というものももらっていくということで、段階的に退職することと、年金の支給というのを組み合わせたものが必要であるということできたのがこの資料5に書いてある部分年金制度なんです。これはその人が60才に達しまして、だんだん退職していきたいという場合には、パートタイムの方に移ってもらう。同じ職場でも、別な職場でもいいんですけども、パートタイムの方に移ってもらう。そうしますと賃金が安くなりますね。そのかわり従前もらっていた賃金とパートタイムの賃金との差が出てくるわけです。その差額の65%を年金で保障しましょうというのがこの制度です。ですから今まで40時間働いていた人が、30時間、又は20時間とか15時間、こうなってきますと、パートタイムから得られる金額が少なくなる。しかし逆に年金額はだんだん増加してまいります。そして65才になった時にやめてもらう。そうすると全額の年金が出ますという制度なんですね。このような制度が世界には例がないんじゃないかと思いません。この制度は、成功したということで世

界各国から注目されているんですが、日本にもこれに類似したものがあるんですね。在職老齢年金というのがあります。まあ在老とか呼んでいますが、これは例えば、年金年齢に達して、例えば65才なら65才になっても、まだ働いているという場合に、給料ももらい、年金ももらい、両方もらうのはちょっと多すぎるということで、年金年齢になってまだ働いているような人は、年金を少し安くするという制度ですね。形としてはこれに似ているんですけども、発想がちがう。多過ぎるから切るというのが日本の在職老齢年金なんですけれども、スウェーデンの部分年金制度というのは、段階的に退職してもらうために、年金とパートタイム労働を組み合わせようという制度であるわけです。そういう制度が実は今から4年前にできあがっているわけなんです。比較的最近のことです。

ノーマリゼーション

それから次は、老人とか、障害者、これは先ほどから申し上げておりますように、とにかく一般の社会の中で、一般の人と同じように、一般の生活をするということで、これはごく当たり前のことになっております。福祉施設にしても、昔は人里離れた辺りな土地に老人ホームを作りましたのが、最近では町の中に、しかも町の中に老人ホームは作らないで、町の中のアパートの一室に住めるように、そしてアパートの一室が老人なり障害者が住めるような環境に改善するというような方向に移ってきております。もちろんどうしても施設に入らなけれ

ばならない老人も障害者も沢山おりますから、そういう方にはもちろん施設が必要でございませうけれども、そうでない人は、一般の中で、一般と同じように生活できるようにするというのが大前提です。ちなみに、ノーマリゼーションということばは、1959年にスウェーデンで初めて使われた言葉だそうですが、この中で一番問題なのはやはり先ほど言ったように社会構造なり、物理的な構造、都市環境が障害者、老人のために作られていなきゃいかんと、そうでないと同じような生活ができないということだと思います。この点に関しまして、建築法の規定の中にはっきりと、「公共的な場所あるいは公共的な建築物の整備の際には、老人、障害者、病弱人、子供が利用しやすいような構造に配慮しなければならない」と書いてあるんですね。法律の中に。このために今ほとんどの建物は、老人、障害者が容易に入れるような構造に作られておるわけです。ごく自然な形でそれが作られるようになっていくということの一つ申し上げておきたいと思います。それからもう一つ老人については生きがいという問題があるわけです。一つの方法としては従前と同じような仕事をする、すなわちできる限り仕事を継続するという事なんですけど、さらにもう一つ特色あるいは、老人教育、成人教育が非常に盛んだということです。これはどういう団体がするかといいますと、日本でいえば財団法人とか社団法人にあたるものが全国に大きなものが11あります。それが全国にいろんな学校を持っています。成人教育、老人教育のためのい

ろんな内容のメニューを用意しているわけです。一番多いのは先ほど言いました語学コースです。あらゆる国の言葉のコースが準備されています。学校はどの程度あるかというと、都市に1つということではなくて、大体歩いて100メートルも行けばそういう学校がビルの一部にあるわけです。全国11の団体が網の目のごとく学校をもっているわけです。この成人教育に対しましては国から費用が出る、補助金が出るということになっています。とにかく語学が一番盛んで、半分位語学です。日本語までもあります。それから体育、体操、手芸、木工、そういうものがほとんどです。各コースの始まるのが9月、秋から始まりますけれども、秋になりますとそういう11の系列の団体がものすごく厚いパンフレットをその地域ごとに出すわけですね。それをみて、ここに行きたいということであれば自由に行けるわけです。余談ですけども、そこにスウェーデン語コースというのがあるんですね。これはスウェーデンにいる外国人のためのコースなんです。スウェーデンにいる外国人というのは、実はハンディキャップ者だというようにみなされている。言葉がわからないんですから、言語障害者ということになる。その障害者のために障害者が障害でない、つまりしゃべれるような状態にする。これは無料、あるいは低額でやらなきゃいかんということになっておまして、私などスウェーデンに行ったばかりの時にはこのコースを受けました。毎日やってくれるんです。しかも無料で。そこまで行き届いているわけです。

児童対策

それから子供に対する対策で面白いのが2, 3あります。最近初期環境が重要であるということが言われております。スウェーデンでも大体6才までに80%の子供の性格が形成されるといわれております。とにかく子供の時には、小さい子供であればあるほど親との接触ということが非常に重要であるということが強調されています。これは当然といえば当然なんですけれども、この初期環境というのは2才か3才かというところではないんですね。もっともっと早い1才の段階、1才でなくてもっと早い0才の段階、0才も生まれた直後だというんですね。これも聞きかじりなんですけれども、発達心理学という学問があって、初期環境ということが研究されているんですけれども、ヤギでの実験によると、生まれて5分間がそのヤギの生育に重大な影響を与えるというんですね。5分間で。これは実は人間の場合にも当てはまるんじゃないかということでアメリカと北欧で非常に真剣に研究がなされているそうです。それで人間も生まれた直後の母子の接触というのが非常に重要であるということから、生まれたらすぐ赤ん坊をお母さんが抱いてやるということなんです。でまたこれは私事なんですけれども、私の場合スウェーデンで女の子が生まれたわけです。でその際出産現場に立ち合ったわけなんですけれども驚いたことには、へその緒を切ってからだを拭いたらすぐお母さんの胸に腹ばいになるように、顔と顔が合うように子供を乗せるわけですね。これで大体1時間から1時間半位

乗せたままにする。どうしてそんなことするんですかと先生に聞きましたら、一つは母体と子供との体温の調節といいますか、急激な変化をさけるためだという。もう一つは、生まれた直後の子供と母親の接触ということが子供の性格形成及び母親の母性の成育に重大な影響があるというんですね。ほんとうに生まれた数分後の母子の接触というものが重要なんだということを聞いて実はびっくりしたんですけれども、まあそれは何を言っているかというところ、できるだけ親と子を、特に小さい段階の子供というのは親と接触しなきゃいかんということなのです。よく保育所がいいか、親の側がいいかと言いますけれども、そういう議論はナンセンスであって、始めからやはり親と子が接触をする。そして集団生活が可能になったら保育所がどうかという議論であって、どっちがいいかということではない。こういうことを言うわけです。ところで親と子は接触すればするほどいいわけなんですけれども、逆にまた、女子労働というのは非常に盛んになってきておりますので、やはり女性を家庭に押しとどめるわけにはいかんということなんですね。母子の接触の時間を多くするというのと女子労働を奨励するということの調整の問題が出てくるわけなんです。これに対してどういような解答を用意したかというところ、子供ができたら仕事は休めるようにするというところなんです。で休むということには二つありまして、経済的にある程度保障されないと休めないということと、それからもう一つは休んだあと職場に復帰した時に不利な扱いを

使用者から受けたら困るという二つの問題があると思うんです。でスウェーデンではこの二つに対してそれぞれ解答を用意したわけです。前者の経済的な問題というのは、子供が生まれたら9カ月間子供を看護、養育するために休んだ男親又は女親に従前の所得の90%を保障してやるという制度なんです。これは両親手当、両親保険とも呼ばれております。90%ですから先ほどの傷病手当と同じ額なんです。これでもって経済的に休めるような手段を構じたわけです。ここで面白いのは男親が休めば男親の90%を保障する、女親が休めば女親の90%を保障する、午前中男が休んで、午後女が休むということもいいし、その場合は午前中の賃金の90%、午後の賃金90%になるわけです。ところがこの9カ月のうち6カ月が普通の両親手当、あとの3カ月を特別両親手当と呼ばれまして、6カ月間は男親、女親どちらでもいいんですが、あとの3カ月間は男親、女親等分に取りなさないかんということなんです。男親が45日、女親が45日取れとこう書いてあるわけです。特別な事情がある場合はもちろん、片方が取ってもいいということになっておりますが、原則としてはあとの3カ月の半分は男親、半分は女親が取らなさないかん、こういうことになっておるわけです。子供の養育に対する男親の責任というものを非常に強調した制度になっています。これが一つの経済的な手段なんですけれども、もう一つは、法律的な手段があるわけなんです。法律的な手段といえますのは、休んで職場に復帰した場合に使用主から不

利な扱いをされたら困るということです。この点については1979年1月から児童看護休暇法というものを作って法律的な保護を与えることにしたわけです。この法律の中には二つありまして、子供が1才半に達するまでは親は全日休んでもいい、職場にいかなくていいということです。でこの1才半に達するまでの、先に述べました6カ月なり9カ月の期間というのは所得が保障されるわけなんです。ところがあとの期間は所得の保障がありません。保障としては、職場に復帰した時に不利な扱いを受けないという保障だけです。もう一つは、子供が8才に達するまでは従前の労働時間の4分の3に労働時間を短縮していいということです。一般的に労働時間は8時間でございまして、その8時間の4分の3というのは6時間ですね。1日の労働時間を6時間に減らしていく、これは8才に達するまで続けていく。そうするとどうなるかといいますと、たとえば女親は朝2時間ほど遅れていく、男親は通常通り出ていくが通常より2時間早く帰ってくる、女親は通常通り帰ってくるということになります。朝の2時間夕方の2時間、これが子供と接触できるんじゃないだろうか、こういう考え方なんです。そういうような働き方を8才までやっていくということなんです。以上のようなことを日本でお話すると、まあどうせ我々忙しいからとれないだろうとかいう声があるんですけども、向うはとかく労働時間はピチッとしております。政府の高官でも私らが行って話をしても、もう5時になると家内と約束があるのでと

そこで打ち切られますので、ほんとうに労働時間というのはビチッとしています。そのかわり朝もビチッと8時から8時半にきています。朝夕2時間というのは非常に大きな意味をもつんです。そういうことで母親と子供の接触時間というのをできるだけ作っていこうという方向がとられています。

社会の子

それからもう一つ、子供は社会の子という観念がかなり浸透しています。こんどの日本の児童手当審議会の答申では、社会の子という概念を出して全児童に児童手当を支給するという答申がなされておりますけれども、子供というのは両親の子供であるのはもちろんであるけれども、さらに次代を担う社会の子であるということなんです。これは標語的には誰でも我々日本人もそう思うわけですけれども、それを法律でもってもう一段高めて、子供の権利というものを保障したわけです。これが懲戒行為制限法という法律なんです。懲戒行為制限法。これはどういうことかという、一つはやはり子供の人権を尊重しないといかんということと、もう一つは、子供というのはほんとうの意味で社会の子だと、社会の子を両親が勝手にいじくりまわしてはいかんという考え方があるんです。この法律はたった一条の法律なんですけど、その中味はどういうものかという、児童養育上いかなる形の暴力も、傷害を発生するのを防止するという場合以外は認められないというものです。ちょっとまわりくどい方ですけれども、簡単にいえば児童養育

上いかなる形の暴力行為も認められないという法律なんです。これは実は1979年7月から施行されたものです。まだ発足して間もないわけですがけれども、まあ去年はちようど国際児童年ということもありましてこういう法律を作ったんだと思います。

高福祉と高負担

さて時間もだんだんなくなりましたものですから、よく言われる高福祉、高負担ということについてふれておきたいと思います。スウェーデンのように福祉国家になるのもいいけれども、なるためには大へんな負担があるということがよく新聞等では言われていると思いますが、この実体は次のような状態なんです。まず負担の方ですけれども、個人の税金というのは平均して38%です。この38%の内訳は国税10%です。これは累進税率です。累進は2%から58%となっていますが平均して10%です。それから県税が10%、これは比例税です。それからコミューン税、まあ市町村税ですね。これが18%。県税とか、コミューン税というのは県やコミューンの財政力によって変わってきます。これは全国の平均です。で合計しまして38%。まあ40%弱ということになります。これがスウェーデンの税金の実体です。ただスウェーデンでは社会保険料の被保険者負担、国民の負担というのはいっさいありません。日本では医療保険でも、年金でも大体半分が事業主負担で、半分が本人負担になっていると思いますけれども、この本人負担はスウェーデンでは全部事業主が負担すること

になっておりまして、社会保険関係の負担というのは、個人にはいっさいありません。もう税金だけです。法人はどうなっているかといいますと、法人税率は大体平均して56%です。内訳は次に書いておきました。が、国税が40%です。それから県税と、コミューン税というのが個人の場合の所得税と同じ税率です。法人の場合の所得税が、まあ全部あわせると68%になるんですけども、実は地方税を計算する場合には、国税分が控除されて計算するようになっておりますので、ちよつと数字が合わないで56%となっております。問題はその次にあります社会保険料なんです。先ほど言いましたように本人負担がなくて全部事業主負担だということになっておりまして、今スウェーデンでは、ブルーカラー労働者を雇いますと、1979年においては年金とか、医療とか、失業保険とか、そういうものもろものも含めると月給に対して36.79%になります。それからホワイトカラーを雇いますと、42.76%になります。平均すると40%を社会保険料ということで用意しなければいかんということですね。たとえばある労働者の賃金が1千万円とすれば、1千400万を用意しないと一人の労働者を雇えないということになるわけです。これは非常に大へんな数値だと思います。賃金とか社会保険料とか含めた1時間当たりの労働コストはどうなるかということ。を計算しますと、1977年で41クローネになります。41クローネ、約2千2、3百円です。これに対して同じ年に比較したら日本は20クローネ、半分ですね。で

すから労働コストというのは日本がスウェーデンの半分になっている。これが非常に大きな問題です。今まではスウェーデンの技術というのは世界の最先端をいっておったわけです。今でもあるものについてはそうですが、日本とか、ドイツとか、アメリカが技術的にスウェーデンに追いついてきます。するとやはり低い方に需要というのは流れていきます。そういうことでスウェーデンの製品というのがだんだん売れなくなるということがおこってきています。国際的な経済不況がもちろん背景にありますけれども、スウェーデンが貿易上赤字になることが多くなったと言われているわけでございます。最終に申し上げたいのは、スウェーデン人に対して高福祉、高負担について質問しますと、高福祉のために高負担があるということではないということ。をいうわけですね。つまり福祉レベルというのが始め決まっています、この福祉レベルを実現するために、負担というのをこれぐらいかけるんだとか、社会保険料をこうするんだとかいうことではないというわけなんです。問題は先ほど言いましたように、平等ということが非常に重要なので、平等化を実現するために累進税をかけたりにしての。つまり福祉というのは配分の結果なんだと言っているわけなんです。そういうことがいつも答えとしてはね返ってくるわけなんです。ですからどこまでも福祉水準が上がると、それでもって大変になるということではない。いかに平等化を実現させるかということを考えてやっていくんだと。ですから、場合によっては福祉レベ

ルは低くなることもあるかも知れん。もっと高くなるかも知れん。それもその時その時の経済状況によって変わってくるのであって、決して福祉だけがピチッと決まっただけで、それによってすべてが計算されて出てくるというものではないということをよく言うわけです。まあそういうことがスウェーデンで聞かれる話です。最後に社会保障の総費用というのは、ここに書いておきましたけれども、1976年に879億クローネ、国が30%、地方が28%、企業が41%、本人が1%。本人負担はないと申しあげましたけれども、自営業者の負担が若干あるということで1%あがっております。あとは企業が41%で一番多いわけです。でこの金額はGNPに対して、27.2%に当たりますが、最近新しい資料を手に入れてみたところによりますと1980年の社

会保障総費用が、1,450億クローネということで、かなり伸びております。879億クローネが1,450億クローネということで、非常な勢いで伸びてきていることがわかります。

結論みたいになりまた繰り返すことになりますが、今後の日本の福祉を考える場合に重要なことは、福祉というのはやっぱり枠組作りなり、条件作りだということ、それからすべての施策の中に福祉政策というものを取り入れていくこと、取り入れていくこと、の二つだと思います。こういうことをスウェーデンでの体験から感じとったわけです。

(この論稿は1980年秋に開催された社会保障研究所基礎講座の講演内容の一部を収録し、本人により若干手直しされたものです。)

海外トピックス(フランス)

健康と社会保障

—社会保障の全国民への普及—

1980年6月25日の閣議において、厚生社会保障大臣から社会保障の普及に関する報告が提出された。

1974年から進められてきた社会保障普及政策が、個人保険制度の最終的な創設を定めた政令の公布とともに一段落したのだ。

1945年にフランスの社会保障制度の基礎が策定された時に考えられていた、あらゆるフランス人に連帯を基本とする仕組み

によって高度な社会的保護を提供するという目標が、今や達成されたのである。

1. 1974年いらいの普及策

ド・ゴール将軍が署名した1945年10月4日の政令は、全国民への社会保障の速やかな一般化と、単一制度の制定を明確にうたっている。この計画は一部職種からの反対のため実現不可能となり、社会保障があらゆる職種をカバーするには、実に30年が必要であった。そのためには、一般制度の拡大と、一部の職業に関する自主保障制度の創設が必要とされた。

しかしなお、この制度においては独身未